

病害虫発生予察情報(2月予報)

令和7年1月28日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (2月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 6.5%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 6.9%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病	発生量：やや少 (発病株率 1.8%)	1月中下旬発生量：少 (－) コナジラミ類発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	コナジラミ類	発生量：並 (寄生株率 8.5%)	1月中下旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
たまねぎ	腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 1.2%)	1月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	灰色腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 0%)	1月中旬発生量：並(発生なし) (±) 防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率 32.0%)	1月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
レタス (非結球 レタスを 除く)	べと病	発生量：少 (発病株率 1.7%)	1月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率 3.1%)	1月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 0.6%)	1月上中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	うどんこ病	発生量：多 (発病株率 0.8%)	1月上中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	炭疽病	発生量：多 (発病株率 1.0%)	1月上中旬発生量：やや多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 1.8%)	1月上中旬発生量：やや多 (＋) ただし、東部地域は多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	ハダニ類	発生量：多 (寄生株率 13.3%)	1月上中旬発生量：多 (＋) 防除員からの報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (寄生株率 6.0%)	1月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準
<https://www.s-boujo.jp/>

静岡県病害虫防除所 HP
が新しく
なりました。



静岡県病害虫防除所 HP
<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～遅い。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は3.2%（平年9.7%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（*Cf-9*）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に撤去し、適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.6%（平年3.8%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。また例年12月以降は、ハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ほ場外に撤去する。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。

●黄化葉巻病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年2.2%）と平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類の平均寄生株率は、7.0%（平年11.4%）と平年よりやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミが増殖しやすい。このため、本病の発生も助長される。

防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

●コナジラミ類

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.0%（平年11.4%）と平年よりやや少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が確認された場合は薬剤防除を実施する。

【たまねぎ】

<生育の概況>

生育は平年に比べ遅れている。

●腐敗病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均発病株率1.2%（平年1.2%）と平年並だったが、一部のほ場において下葉での発生が目立った。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は細菌病であり、凍霜害や強風雨による傷口から侵入するため、傷んだ葉がある場合は、強風雨の前後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・ネギアザミウマによる食害も本病の感染を助長するため、発生に注意し、本種の防除を実施する。
- ・発病株は感染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ・収穫後の植物残さは本病の伝染源となるため、1か所にまとめ、ビニールで被覆し菌を死滅させるなどして適切に処分する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第4号（たまねぎ 腐敗病）」](#)も参照する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、鱗茎に発生は認められなかった（平年発生なし）。
- ・防除員からの報告では、本病の発生について「やや多い」と回答があった。
- ・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。
- ・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率1.4%（平年27.8%）と平年よりも少なかった。被害程度を示す被害度は、1.4（平年17.4）と平年より低かった。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・本種の発生が確認されていて、収穫までに2週間以上を要するほ場では防除を実施する。成幼虫ともに葉と葉の隙間に多く寄生しているので、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

生育はやや早い～遅く、地域によりばらつきがある。

●べと病

予報の根拠

- ・1月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.5%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない（病原菌の生育適温は10～15℃で、多湿を好む）。

防除対策

- ・本病原菌は空気伝染するため、近隣のほ場で発生が確認されている場合は薬剤の予防散布を行う。
- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・罹病残さはほ場外に処分する。
- ・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・1月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率2.0%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない（本病は比較的低温で多湿条件を好むため、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。
- ・凍霜害は茎葉を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

防除対策

- ・降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル内が多湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・1月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.9%）。
- ・本病は土壤中に生息する菌によって媒介される土壤伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壤中のウイルス保毒菌量を少なくするように心がける。

【いちご】

<生育の概況>

生育は県下全域で平年よりやや遅く推移している。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・1月上中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率0.5%）。
- ・1か月予報では、降水量はほぼ平年並だが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。
- ・曇雨天が続く場合は、施設内の多湿を避けるために薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。また、発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・1月上中旬の巡回調査では、一部ほ場で多発していたことから、平均発病株率は1.3%（平年1.1%）と平年よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、発生予防に努める。
- ・多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。果実でも頻繁に発生するため、発病果の速やかな除去を徹底する。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 1月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は1.4%（平年1.2%）と平年よりやや多かった。ただし、例年に比べ欠株や補植が目立った。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れてほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、殺菌処理を行ってから処分する。
- ・ 本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、殺虫剤のみの散布、感受性低下の疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC: 1）、DMI 殺菌剤（FRAC: 3）、Qoi 殺菌剤（FRAC:11））の散布は避ける。
- ・ 厳冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する場合がある。
- ・ 発生状況及び防除対策については、[「技術情報第5号（いちご 炭疽病）」](#)も参照する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 1月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.9%（平年1.6%）と平年よりやや多かった。
- ・ 地域別の平均寄生株率は、東部地域で2.0%（平年0.7%）、中部地域で2.6%（平年2.6%）、中遠地域で1.0%（平年1.3%）と、東部地域では発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ ほ場をよく観察し、初期防除に努める。
- ・ 天敵を利用しているほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 1月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は19.7%（平年14.0%）と平年より多かった。
- ・ 地域別の平均寄生株率は、東部地域で7.4%（平年11.0%）、中部地域で19.8%（平年21.8%）、中遠地域で31.8%（平年9.2%）と、特に中遠地域で発生が多かった。
- ・ いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について4名が「やや多い」、1名が「多い」と回答した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・1月上中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.7%（平年2.5%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、本虫の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため除去する。
- ・天敵製剤を利用するほ場では、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第6号（いちご アザミウマ類）」](#)も参照する。

【稲】

<その他病害虫>

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・県内全域で分布が拡大している。未発生地域への人為的な貝の持ち込みを防ぐため、トラクター等の農業機械を使用する際は作業するほ場の順番を考慮するとともに、既発生ほ場から土が移動する危険がある場合には農業機械を洗浄するなどの対策をとる。
- ・昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・本種は低温に比較的弱いですが、土中の貝は生き残るため、2月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【小麦】

<その他病害虫>

●うどんこ病・赤さび病

- ・昨年5月上旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は1.0%（平年 20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も2.6%（平年 15.1%）と平年より少なかった。
- ・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く、「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。またうどんこ病の第一次伝染源は、前年の被害残さで越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源は、ほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・窒素肥料の過多を避ける。

【茶】

<その他の病害虫>

●赤焼病

- ・病原菌は細菌であり、主に強風雨によって伝染し、傷口から感染する。また、本病は寒害、凍害によって発生が助長されるため注意する。
- ・常発ほ場では予防的に薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、「つゆひかり」、「おくひかり」などの品種は本病に弱いため注意が必要である。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和7年1月23日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月25日から2月24日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率60%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	30	50
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	10	30	60
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月 : 1月25日(土)～2月24日(月)

1週目 : 1月25日(土)～1月31日(金)

2週目 : 2月1日(土)～2月7日(金)

3～4週目 : 2月8日(土)～2月21日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1

TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780

URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>